

令和3年度 第3回社会教育委員会議 会議録（要旨）

- 1 日時：令和4年1月18日（火）10:00～11:45
- 2 場所：北九州市立生涯学習総合センター 第2・3研修室
- 3 出席者 委員 山田副議長他 10名
事務局 市民文化スポーツ局長 柏井 他 9名
事例発表者 2名
- 4 議題、議事の概要
 - (1) 市民文化スポーツ局長あいさつ
 - (2) 議題
 - ア 今期の社会教育委員会議の協議テーマについて（最終案）
 - イ 協議テーマに関する意見交換
 - ① 市民センターについて
 - ② 実施事例発表
 - ③ グループワーク
 - ④ まとめ
- 5 主な質疑応答、意見等

議題（ア）今期の社会教育委員会議の協議テーマについて

（事務局から、協議テーマ最終案「“学びと活動の場” からつながる地域づくり・人づくりについて」の説明）

事務局：前回の会議では、協議テーマの選定にあたり、委員の皆様から貴重なご意見をいただいたが、その中で、「デジタル化への対応」が必要ではないかというご意見があった。この意見を踏まえ、議長、両副議長、事務局とで協議し、新たに取り組みに追加し、今後の協議の中で、この「デジタル化への対応」についても取り上げることにした。

（一同「異議なし」）

議題（イ）協議テーマに関する意見交換

（事務局：①市民センターについて説明）

② 事例発表

事務局：防災危機管理に関する事例及び子どもの健全育成、体験活動に関する『地域で育もう「未来の種」事業』の取り組み事例を皆様にご紹介する。

今回のグループワークの目的は、発表事例について、地域づくり・人づくりの観点から良い点を数多く挙げていただき、その中から成功の要因を探っていこうというものである。

今回、グループワークを行うにあたり、各グループ（A、B、Cの3グループ）の進行役、ファシリテーターとして、三名の社会教育主事が参加する。

【事例発表1「防災の取り組みを通じた地域づくり・人づくり」（平野市民センター）】

館長：「平野地区みんなで取り組む防災」ということで、平成30年度から令和3年度まで取り組んだ事例について発表する。

平野地区は、豊かな自然に恵まれ、二つの自治区会から構成されている。高齢化率が42.4%。かなり高齢化が進む中、美化、防犯、防災などの活動や世代間交流に積極的に取り組んでいる。

このような（取り組みの）実施に至った経緯としては、高齢者や一人暮らしが多く、土砂災害警戒区域に指定された地域も多いことがある。また、近年、自然災害が激しさを増し、集中豪雨、台風被害のニュースを目の当たりにして、全国的に地域での共助が重視されたことも挙げられる。

また、平成30年7月6日に、近くの平野川が大雨で氾濫し、災害がどこでも起こるという意識が高まることに繋がったのではないかと思う。

まず、平成30年度の取り組みとして、北九州市危機管理室支援事業「地区 Bousai 会議」に申し込んだ。年5回、NPO法人「好きっちゃ北九州」から講師を迎え、講習会を実施した。

各町会別に問題点を洗い出し、具体的に判定ルールというのを決めた。そして、各町会別に計画書を作成。この計画書は町内会長が所持し、町内会に入っていない人にも避難が伝えられるように、民生委員とも関係づくりを行った。

後日、伝達連絡方法DVDを作成し、まちづくり協議会（のメンバー）や顔なじみのお隣さんが出演するというので、（住民が）大変関心を寄せるものができた。

第3回の訓練は地区住民70名が参加し、近くの花尾小学校体育館で実施した。連絡や伝達方法の実践をして、参加住民の方がかなり意識を高める結果が得られた。

平成31年度には、前年度のフォローアップ講座を受講。ここで、毎年、防災訓練を定例実施することを、まちづくり協議会と防災部会、部会長等で決定した。訓練後には、備蓄品のアルファ化米を使ってカレーライスをふるまった。災害時にはこういった非常食が大変役立つということを参加者は認識したと思う。

次に、令和2年度の実施である。このあたりからかなりコロナの影響があり、講座を継続するかどうか迷ったが、まちづくり協議会・自治区の要請で、危機感の高まりもあり、さらにフォローアップの2回目を受講した。感染症対策を万全にした中で、前回作成した平野地区防災計画書について、新たな疑問や問題点などを掘り起こして、見直しをした。その中で、町会の一つから、自衛組織である「東川頭お助け隊」が結成された。防災防犯員7名のメンバー構成で、「東川頭から1人の被災者も出さない」を目標としている。

住民アンケートを実施したところ、回答の中には、「これ以上町会の仕事を増やすことはやめて欲しい」、「災害対応などは行政の仕事じゃないか」、「災害が発生しても放置してくれ」などの意見もあった。役員で再度話し合いが持たれ、「あの人が避難しないなら私もしない」という、負の連鎖は作らないよう、できるだけ個別の事情を把握して、避難したくないという人の気持ちに寄り添いながら、避難を促すことが必要であるという結論に至った。

令和3年度に入ってもコロナは収束する気配を見せないが、専門家による講座を実施して講座を継続することとし、まず、感染症対策を踏まえた避難所運営講習会を開

いた。

その後、北九州市から避難所運営のモデル地区の要請を受け、地域と連携した避難所開設運営モデル事業の研修を受けている。

さらに、防災気象情報の活用についても、専門家の講義を受けており、また、まちづくり協議会でも、自主的に研修会を開いている。センター内での災害備蓄品の確認、部屋の配置の仕方など、積極的に取り組んで、受け入れる体制の意識を高めていった。

市民センターでも備蓄品の管理、整理、ラベリング、そしてさらに、避難所開設の受け入れマニュアルなどを細かく作成した。今後はさらに防災の取り組みコーナーを設置し、来館者の方が、いつでも目にして、防災意識の向上につなげたいと思っている。

昨年8月に、大雨により警戒レベルⅢが発令され、急遽、まちづくり協議会のメンバーで受け入れ体制を整え、市の職員とともに避難者の受け入れに従事している。

このように、一連の事業をしているが、事業の成果として挙げられるものが三つある。一つ、自衛組織「東川頭お助け隊」の結成。後日、防災研修で防災士の資格を取ったということで、別の方から協力の要請などもいただいている。2番目としては、まちづくり協議会の防災の取り組みが進んでいること。3番目としては、平野市民センター避難所運営に向けての取り組みが現在進行形で進んでいること。

最後に、課題である。課題1として、土砂災害警戒地域はある地域に偏っているため、地域の温度差があることである。地域全体としての協力する意識を高めるということが考えられる。課題2としては、現在は取り組みが順調に進捗しているが、役員・組織の高齢化により、活動量の低下が懸念される。次世代の地域活動の担い手の発掘が最も重要な課題であると思っている。

対策として、周知での工夫を進めていく。館内掲示、防災講座、ホームページ、市民センターだよりなどで周知し、地域全体に認識されるようにしている。2番目の対策としては、多世代交流事業、青少年育成事業など活躍のきっかけづくりになる取り組みをさらに継続していくことを考えている。

このように、事例の防災会議・講座を通じて、防災の取り組みは、まず、日頃のご近所づき合いから始まるということを実感した。今後も地域づくり・人づくりに繋がる活動で元気な平野校区を目指していく。

【事例発表2「子どもの体験活動や世代間交流の取り組みを通じた人づくり・つながりづくり」 (足原市民センター)】

館長：今年度『地域で育む「未来の種」事業』として実施した「やっぱり！みんなで！遊び隊！！～自然から学ぶ生きる力～」について発表する。

この事業を受けるにあたって、実はかなり時間がかかった。コロナ禍で事業ができるのかと躊躇する（市民センター）職員が、同じ方向を向いてくれるまで待った。やがて、話をする中で1人の職員が手を挙げてくれた。次に、持続可能な生涯学習を考えたとき、やはり地域を巻き込むことが必須だと考え、まちづくり協議会会長に相談、そして子ども部会に提案をし、子ども部会長がメンバーと話し合い、同意を得ることができた。

このような段取りに時間をかけて行ったことで、役所には、事業を受ける返事が遅れ、大変ご迷惑お掛けしたが、大切な準備期間であり、じっくりと待っていただいたことに感謝をしている。

また、日常の何気ない会話から、ある方がキャンペーンインストラクターを取得したと

いうことを知り、キャンプを行うことが決定した後に、コーディネーターとしてメンバーに入らせていただくようお願いした。

講座の主力メンバーは10名で、講座を進めながら、地域に声をかけ、講座全体を通し、センターを含め総勢30名の方々が関わってくれた。

事業のテーマについて、「子どもの笑顔を増やしたい」、「思いっきり外で遊ばせたい」、「校区の特色である自然を生かしてはどうか」、「自分で考え、行動できる自立心を育てよう」という意見が出て、経験と学びを行い、お泊りキャンプで協調・協働性、自立心、創造性をしっかりと身につける講座にしようと内容が決まった。

講座は全7回とした。

第1回オリエンテーションから始まり、まずは外遊び、山登りで絆を深め、「キャンプに向けて」で学習をし、そしてデイキャンプで自信と課題を持ってお泊りキャンプに臨む。

次に、講座実施にあたっての決め事を、

- ・子どもの自立心を育むため、大人が手を出し過ぎない。
- ・自分で考え、行動する力を育む。
- ・関わるメンバーは手伝いではなく、誰もが主役となるよう、役割を担う。
- ・地域と子どもが深く関われるよう、特別な理由がない限り、保護者の参加はなし。

とした。

普段の子ども講座は、若い世代である保護者を巻き込み、繋がりをつくるが、今回は子どもをより地域と深く関わらせる、また、子どもたちの自立心、仲間との共同性を育むという目的を優先した。

「あそび隊」の募集チラシを小学校から全クラスに配布していただき、コロナ禍に加え、野外活動、宿泊があるため、同意書の提出を必須とし、SNS、写真掲載やアレルギーの確認等も行うようにした。また、講座内容が決まった時点で、足原小学校の校長先生にもご理解いただきたく、講座の説明をしに伺った。

第1回オリエンテーションでは、スタッフ紹介、自己紹介を行い、ゲーム遊びを行った。また、オリエンテーションと30分ずらし、別室にて保護者会を行い、まちづくり協議会会長に講座の意義を、子ども部会長に地域で行う子育て支援の思いをお話しいただき、私から講座の内容の説明をした。

8月20日から9月30日、感染症対策として、事業や貸館業務が中止となったために、三つの講座の延期、日程調整ができなかったデイキャンプが中止となった。

このような状況でお泊りキャンプができるのかという意見が挙がったが、一人一人が意見を発言し、改めて今必要なことを考え、お泊りキャンプは決行で団結した。

10月2日、第2回「キャンプに向けて」を開催し、役割分担決めや、安全に過ごすための手法を学んだ。

第3回のお泊りキャンプでは、まず足原小学校おやじの会により忍者修行争奪戦[※]を行った。

[※] 忍者修行とは、毎年おやじの会が小学校で行っている遊びの行事である。

その後、自分たちでカレーづくりを行い、食後は、地域の方であるキャンプの達人が薪を組んでくれ、素晴らしいキャンプファイヤーを行うことができた。

火を見つめる時間は、子どもも関わった大人も皆、心が一つになったように感じた。

この日の朝、集合の時点で、「ゲームができないから、キャンプに行きたくない」と発言した男の子が、この火を見ながら、「ずっとこの時間が続いたらいいな」と話してくれた。心の変化、きらきらした表情がとても印象的だった。2日目も元気に活動し、「また次回、みんなで会えるね」と笑顔で解散した。

第5回は延期となった外遊びで、子どもたちが自分たちで並び、声をかけ合う姿に結束力が目に見えるようだった。明らかに子どもたちの表情も態度も変わったことを感じた。

第6回、最後の会は、小文字山に1時間かけて登った。皆、班のメンバーに声をかけ合いながら行動した。

この講座は、楽しく遊ぶ活動が主であるが、講座を通して、周りを見る目、気づかい合う心、判断力、結束力が自然と子どもたちに身に付いた。

講座の中で、経験だけではなくて、気持ちの書き出しも併せて行った。

その一つが、「未来の花づくり」である。全体資料3の4ページに記載しているが、それぞれ個性的で素敵な作品ができた。この作品は文化祭で展示し、地域の方、保護者の方にも見ていただいたが、保護者の方との会話もはずみ、若い世代と繋がるきっかけともなった。

また、写真を館内に大々的に貼り、館報に掲載、フェイスブックにも積極的に投稿することで、多くの方々に事業を知ってもらうようにしたところ、地域の方が「キャンプに関わりたかった」「山登りはいっしょに行くよ」など声をかけてくれた。

この事業の成果としては、地域の方々の方が関わり、講座を実施することができたことである。その結果、健全で豊かな心を育む活動となり、子どもと地域の方と心繋がるかけがえのない時間ともなった。関わった地域の方も結束力、信頼関係が深まり、地域を支える人材としてより大きな輪が広がる良い契機となった。

また、事業内容を市民センターで紹介することでも、地域の方と繋がる機会ができた。子どもは遊びから生きる力を学び、関わる大人は子どもから希望をもらい、事業から多くの縁が繋がった。

子どもが地域の方と繋がり育っていく。まさに世代で繋がりつなぐ循環型の持続可能な地域づくりであり、素晴らしい校区の底力を実感した。

お泊りキャンプが今回大きな鍵となったが、講座が成功した秘訣は、キャンプ実施というよりも、関わった大人が子どもとともに楽しんだこと。楽しさの共有ができたことだと実感している。

大人がどう関わりを持つかということが、地域での子育て支援には大切で、センターの役割として、大人をどう巻き込むかが最も重要でないかと考えている。

講座を終えての課題としては、今後も継続的な活動とするための体制を作っていくこと。

そのためには、事業費の補助は今回だけなので、自主的な活動ができるよう、今後の費用についても検討が必要と考えている。

また、今回、若い世代の方々も参画し、講座を支えてもらったが、仕事をしながらの講座実施、会議等の時間調整の難しさを実感した。その状況で、密な体制づくりに力を注ぐことも大きな課題である。

最後に、この生涯学習の実施は、「コロナ禍だからできない」のではなく、「コロナ禍だからこそ、心一つに団結して実施できた」と実感している。

【事例についての質疑応答】

- 委員：この事業（『地域で育もう「未来の種」事業』）は、他でも実施していると思うが、市はどのくらいの費用を支出し、どのくらいの市民センターでの実施を目指しているのか、全体的な部分を教えてほしい。

事務局：この事業は、今年度は全体で 200 万円の予算である。17 館で実施しており、一館当たり、必要額の差はあるが、15 万円程度である。来年度の予算はまだ決定していないが、300 万円の予定である。

委員：(市民センターは) 130 館あるが、全部で実施するとなったら、300 万円では足りないのではないか。

事務局：全市民センターで実施すると 1,000 万円以上かかると思うが、この事業は手挙げ方式で希望する市民センターに実施していただいている。市民センターによっては体制がとれないとか地域の負担などにより、今の時点では実施が難しいというところもあるため、手挙げ方式で実施しているところである。

委員：今の予算の話聞いていても、予算以前にやる気というか、体制、内容を含めて、誰がリーダーシップを持って言い出し、フォロアーやサポートできる方がいるかがネックだと思う。

足原市民センターの取り組みでは、最初に、体制が整うまで待った上で、やれることを確認して進めた。その体制づくりがネックになる話かなと思って聞いていた。

(平野市民センターの) 防災も、おそらく毎年のようにいろんなところでいろんな災害が起きて、自分のところで起きたら大変だという意識は、多分どの地区もあるかと思うが、(誰が) 言い出して、(誰が) 束ねて、フォロアーを含めてやるかということ、手が挙がるまでのその前提となる段階が課題なのかと思って聞いていた。

一からやるのであれば大変だろうが、こういう事例、どのようなメンバーをどのように巻き込みながらやったかなど、実施の前段階の取り組み方が非常に参考になり得ると思う。

そこまで行けば、あとは具体的に取り組みをマニュアル的に、幾つかの選択肢を示した上で、自分のところに合うような事例をピックアップして実施することは、体制ができれば、でき得る話ではないかと思って聞いていた。多分そこがネックかと思う。

だから、逆に言うとその、手が挙がりすぎて、予算が足りなくて困るほどになるステップに早くなるには、どのように各地域でそのような機運を醸成して、一緒にやりましょうというメンバーが集まるかが、まずは前段階でよく考えないといけない部分かと思う。

委員：この二つの発表を聞いて、非常に、素晴らしい取り組みをしていると感じた。

特にこれからの一番の問題である子どもたちの自立心の養成、それから災害に対する取り組みである。北九州市というより世界中が(目標とする) SDGs もそのためにあるようなものである。

北九州全体で見ると、町内会の積極性(があるところ)とそうじゃないところがあると思う。これは今日、市議員さんも出席しているので、特に予算面では協力していただいて、やるべきだと思う。冒頭に説明があったが、洋上風力の資金を港湾(空港局)が今やっているの、ぜひ来年の予算にこれを入れて、進めるべきだと思う。

特に、この二つの問題も今、日本全体の非常に大きな問題である。こういうのはやはり大いに取り組むべきである。よーいドンで行くのは現実に難しいと思うので、成功事例ができるところから大いに取り組み、マスコミも大いに利用し、広報をして広

く市民に知らせると（良いと思う）。

特に最初の取り組み（平野市民センターの防災の取り組み）で、これは行政がやるべき仕事ではないかという意見もあったというが、行政が何でもやるというよりも、まずは市民が、できる人から協力してやっていくというふうに少しずつ変えていかないと（いけない）。高齢化で、企業の力もだんだん難しい状況にきており、収入が限られる中でやるので、自分たちでできること、それからお互い助け合っていることということで、この二つの発表を聞いて、非常にすばらしい取り組みだということを感じた。

企業にもこういう点は大いに発表して経営者の理解も得るということも大切ではないかと思う。総論だが、そういう感じがした。非常にいいテーマを聞かせていただいて、参加してよかったと思う。

③グループ討議

出席委員11名がA、B、Cの3グループに分かれ、各グループにファシリテーターとして社会教育主事が1名ずつ入り、グループ討議を行った。

各事例の良い点を数多く挙げ、その中から成功の要因を探った。

④まとめ

【グループ討議内容の発表】

Aグループ：事例1では、とてもタイムリーなことを取り上げ、継続したことでまた進化していったところがとても良い。それから、いろんな地域のことを把握しながら体制づくりなどをし、それがまた工夫につながったこと、また、不参加の方、町内会に入っていない方にも広げる工夫をしているところがとても良く、いろんなところで工夫ができています。

事例2は、地域の特性を生かしたことで、誰かが手を挙げて巻き込んでいく、ということが、うまくいったのではないかと。それから、事業の体制をきちんと整えたところ、子どものプログラムでありながらも大人もというところ、そこに繋がることのできたこと、それからやはり事業を何のためにするかという決め事をしっかり取り決めたこと、最後に、皆さんでマッチングをしていくということ、誰がやるのかとか、学生を取り込んだり（したこと）、そういうこともすばらしい。

全体的に、その体制と一緒にやる人とか、共感をして一緒にやる人を引き寄せる仕掛けとか、要するに誰が言い出して誰が協力者になるのか、そういういろんなテーマがうまくいって、こういうこと（発表事例）ができたのではないだろうか。

Bグループ：事例1については、地域の高齢化や町内会組織の弱体化など（の問題）が、防災のこの取り組みによって活性化できる要因になるということも考えられるのではないかと。

どれも自分たちで意識をちゃんと持つような取り組みで、自分たちでマニュアルを作っていくような、自分たちで考えて実行に移していくということがとても大切である。（平成）30年から（の実施）で、長く継続をして、毎年毎年、前年度のことをブラッシュアップしていつていることもいいのではないかと。事業するとき企画をするが、未来の種事業（事例2）では、そこにコーディネーターという全体を把握して導いていってくれる、アドバイスをする人という存在も大切という話もあった。

ぜひPTAなどの若い世代にも広げていただくと、それこそ多世代交流などもでき

る。

事例2は、この組織を作るまでに館長が、我慢強く「やりたい」という声が出るまで待ったこと、みんなで目的や課題をきっちり共有していること、そういったことが事業の成功に繋がっているのではないか、ということである。

やはりそのような話し合いがちゃんとできているからこそ、事業のプログラムなどがきっちりできていっているのではないか。

Cグループ：事例1と事例2のどちらも事業を実施するにあたって、二つの団体をまとめあげるリーダーであるとか、それを引っ張っていくリーダー、このようなリーダーの存在というのがすごく大きいということがあった。

それから、事例1の方はお助け隊の結成など（があり）、事例2でいえば、子どもを中心に考えることによって若い世代を取り込むという人材発掘に繋がっていった。また、将来を見据えた人材づくりを視点に活動を大きくしようとしている。このような人材の発掘を大切にしていっているということがどちらの事業もあった。

それから、地域の協力と（資料に）書いてあるが、これは事業をするには、住民が主体的に活動していかないといけない（ということ）。また、このような『「未来の種」事業』とか「みんな de Bousai 事業」を実施するにあたっては、地域におろしていかなきゃいけない。その地域におろしていくのは館長であり、その館長の存在というのはすごく大事である。

どちらともいえるのが、多くの方が参加していること。事業をすることになったとき、1人ではなかなか参加するのは難しい。普段から多くの方の繋がり、この人が行くなれば私も行きましようとかの仲間づくりができていますので、事例1でいえば約70名、事例2でいえば約30名の方々が参加している。この普段からの仲間づくりが重要である。

コミュニティがうまくいっているところはいいが、コミュニティ関係が崩れている、仲間づくりが崩れているところは、地域の関係づくりに館長の存在、地域を作り上げていく館長の存在が、大変重要である。

【副議長総括】

三つのグループの共通的成功要因と考えられるのが、まず総体的にプログラミングの中で工夫されていること。

防災も子どもの体験活動等についても、タイムリーな課題に工夫をしながら対応している。その中で、役割分担ができていたり、いわゆるコーディネーターなり或いは人材発掘なりの館長の役割と、プログラムを動かす人がマネジメントされているということが共通点として挙げられているかと思う。

また、こういう活動はできるだけ多くの方が参加してもらうことで、よりプログラムが良くなっていくので、声かけなどの繋がりづくりもしているという共通点が、成功要因として挙げられるのではないかと思う。

事例1については、やはり「ご近所づきあい」という言葉が非常に心に残ったが、やはり日頃からつき合いがあるところには、そういう活動が活発にでき、被害を最小限に抑えられているという成果も発表されている。

そこが非常に悩ましい問題で、どうできるかというのがやはり一番課題だと思うが、認識されているということが非常に素晴らしいと思った。

また、防災の取り組みから幾つかの団体がまちづくりの方に活動が広がっていると

いうことも一つの大きな成果だと思う。

昨日、新聞に、直近10年間の自主防災についてのデータが掲載されたが、非常に減っている。特に、必要性の認識は増えているのに、実際の避難訓練なり、学びというのは、この10年間に減ってきている。

その大きな原因は、高齢化、次世代育成が1位、2位で、3番目がコロナウイルスであった。これは必然的に社会の流れとしてはそうになっているが、こういうプログラムが地域にたくさん根づいてくるというのは、モデルとして非常にいいと感心した。

それから二つ目の体験活動の次世代育成については、先般子どもの体力測定が文科省から出たが、これも過去最低という形で発表された。その前には、コロナ禍において、小学生が転ぶという回数が非常に高まっていて、けがをしているというデータも新聞紙上で出た。この数年、子どもたちの体力の低下が非常に心配されており、生活体験、自然体験、社会体験ということが非常に重要である。

こういうプログラムがコロナ禍にうまく入れられている。企画もされているし、またプログラミングも段階を経てしっかり工夫している。今の時代、このような活動をいかにモデル化していくかということが非常に重要かとこれも感心した。

併せて、今日最初の頃にご質問があったように、こういうことをするにはどうしても財源の確保が（必要で）あり、やはり市の事業に参加するときの参加しやすさや手の挙げやすさなどがあると思うので、参加しやすいシステムを皆さんで、自治体も一緒に作っていくことがいいと思う。

しかし、成功要因をいかに具現化していくかはなかなか（難しい）との意見も出た。実際には行われぬというか、難しいところが非常にあって、具現化は難しいが、着実に社会教育や生涯学習のプログラムでそこを埋めていくということが、今の時代の社会教育の一つの必要性かとも感じた。

（グループ討議で）成功要因が多くあがってきたのは、非常に成果だったと思う。

事務局：話に出た財源や取り組みやすい仕組みづくりなどの部分については、令和4年度以降の事業実施に生かしていきたいと考えているので、引き続きよろしく願います。